

日本家政学会 第42回大会 特別講演
1990年5月26日(土) 於 中村学園大学

吉野ヶ里遺跡と弥生文化

福岡大学人文学部教授
文学博士 小田富士雄 氏

私どもは吉野ヶ里の調査が始まってから新聞やマスコミにはふりまわされてきましたが、その後九州から東上していったブームはまた最近戻ってきているし、吉野ヶ里ブームの怖さをつくづく感じているしだいです。私どもの学会と、この学会とは少し様子が違いますので、という話をすればよいのか足踏みをしている状態ですが、私どもの話は遺跡や遺物などのモノが中心なので足りないところはスライドで補っていきたいと思います。

まず、吉野ヶ里遺跡がこれだけめざましくなりましたのは、あれだけの広い範囲にわたって集落や墓などがほとんどそっくり残っているということです。いたるところムシクイ開発の現在、あのような大型の環濠集落の全貌がわかるということではなく、そういう意味で他所では掘ったとしても望めないような古代の集落が出てきたということです。

もう1つは残ったという結果から申しますと開発側にもお礼をいわなければなりません。今回は工業団地という大型の開発事業ということで、あれだけのものが一気に全部露出されることになりました。

それから保存ということに関しては行政側が決断権を持っていますが、佐賀県知事の決断が早く、以来行政各局が残す方向に急に走りだしたということです。

最後に残すということとお金の問題になりますが、文部大臣がやってくる、総理大臣がやってくる、そしてお金もついてきたというわけです。ところがこれは他の遺跡には不利益をもたらしました。あれだけの大遺跡には3年で15億近い費用が出されますから他の遺跡は当分おあずけということになってしまいます。大きいものが残ると他の遺跡が犠牲になるというのが日本の文化財の現状であります。

そういうことで非常に運よく残った遺跡ですが、これがあれほど人々の関心と呼んだというのは誰が言いだし



たのか邪馬台国とくっつけたからです。邪馬台国人気というのは日本ではたいへんなものです。昨夏、韓国に行ったところ吉野ヶ里や邪馬台国なんて関心がない。むしろ藤ノ木古墳の方に関心がある。邪馬台国ブームというのはまったく日本だけの現象のようです。物見櫓だとか環濠だとかが「魏志倭人伝」にでてくる内容におのおの当てはめられていったところに問題があります。私ども考古学を専門にしているものの立場としましてはそこが邪馬台国と考えているものは1人もいないのです。ある人が念のため佐賀駅でタクシーにのって「邪馬台国に行ってくれ」と言ったところ、吉野ヶ里につれていってくれました。邪馬台国ブームなるものが国の施策にまで多大な影響を及ぼすパワーとなったということはわれわれも認めざるをえません。

吉野ヶ里の性格を学問的に言いますと、弥生時代、地域におのおの原始的な国ができてくるわけですが、国の首長というものがいたと思われる中枢の集落の全貌がそっくり現れた。しかも稲作伝来から大和政権が出てくる3世紀までの間の600~700年ぐらいが弥生時代といわれる時期ですが、その全部の時期をこの遺跡はカバーし

ているわけです。吉野ケ里というのは1つの国の歴史の初めから終わりまでが凝縮されており、しかも大規模、弥生時代の遺跡の中でも1番か2番目にランクづけられるものでしょう。

私どもの分野で申しますと、吉野ケ里遺跡には大きく分けて、集落の問題、それからお墓の問題があります。お墓の中からは朝鮮半島系の青銅器やガラス製品等が出ており、大陸との関係が非常に強い遺跡だということもわかります。そういうところから、佐賀県では有明海と大陸を直接結びつきたいという希望が強くなってきていますが、普通歴史家の立場から申しますとやはり福岡周辺が大陸の門戸だということになります。

集落の問題ですが、吉野ケ里では外濠と内濠からなる二重の集落ができています。内濠で囲まれた長方形の一画は南北150メートル、東西70メートルぐらいの範囲に濠が巡り、東西2カ所の濠の張り出した部分に物見櫓があります。そのすぐ脇の方は、濠が一部切れて出入り口になっています。外濠は南北1キロメートル、東西は250メートルぐらいかなと言われていました。ところが遺跡は西半分しか掘られていない。東は三田町に入のですが、丘陵の東の裾に田手川が流れていますからそれより越えることはないだろうと言われていました。ところが実際調べてみると、田手川を越えてさらに東に行くのです。この田手川は昔はもっと東にあったらしいのです。そうなるのだいたい30ヘクタール、30万平方メートルが大濠に囲まれた集落だろうというわけです。濠は深さ6メートル、幅6メートルぐらい、濠の断面はV字状になりますから落ちたらちょっと上がれません。濠の外側には、掘って余った土を盛り上げ土塁を築いていたらしい。外濠は弥生時代の中期、内濠は弥生時代の後期ということですよ。

中には300ぐらいの竪穴住居がありまして、これも時間的には前後関係があります。さらに外濠の西側には18棟の高床式倉庫が出ています。外側に倉庫があったら攻められたときどうするんだろうという意見があったのですが、その後、北、西、東と深い谷になっていて、天然の要塞を利用していたことがわかっています。

次にお墓ですが、2,000基まで現在確かめられています。その中には甕棺を2つ合わせてその中に死体を入れるというものがたくさん出てきています。また、もう1つ問題になりましたのはいちばん北側の環濠の中に墳丘墓といわれる盛り土の墓が出てきたことです。こういう高塚墳は古墳時代が本命ですが、それが弥生時代にさかのぼって出てきたのです。南北40メートル、東西26メ

ートル、高さ4.5メートルという、注目すべきものです。一部を断ち切って、中の検索をやりましたところ、5〜6個甕棺があり、朝鮮半島の青銅の武器等が埋葬されていました。一般の人々は甕棺に入れて群集墓に埋葬されていたようです。このころすでに、階級差がはっきり出ていたということです。

青銅器につきましても北九州、福岡から朝鮮半島系のものが奴国の王墓や伊都国の王墓で発見されています。これらはすでに個人の墓ですが、吉野ケ里はもう一つ前段階で、墳丘墓の中には王になるような人も入っているけれどもその家族も入っています。この青銅器の分散的な所有のしかたからも小さな首長から王への動きが考えられてきます。

あまり時間ありませんのでこれからはスライドにうつらせていただきます。

1. 稲伝来ルート・北ルート

- ・（間接説）山東半島→朝鮮西南部→九州
 - ・（直接説）揚子江→九州・朝鮮
 - ・（柳田国男）東南アジア→台湾→琉球
＝南ルート
- 考古学者 山東半島伝来説

これは稲の来たルートです。まず、北から来たルート。それから山東半島から朝鮮半島をかすめて来るルート。次に長江から直接九州、朝鮮半島へ行くルート。そしてこれは今では非常にロマン的なものになりましたが、柳田国男さんのような民俗学者や育種学者が言っている、江南、台湾、琉球を通して南から溯ってくるルート。私ども考古学の方のものは、稲作に伴ってくる器具類などの関係で言いますと、山東半島の南の方から朝鮮半島をかすめて入ってくるという説が有力です。

2. 吉野ケ里集落を上空より見たもの

内濠、外濠の説明

これが吉野ケ里の集落を上から見たところ。下が北になります。中央部、長方形で囲まれた区画が内濠、内濠で囲まれた一画です。画面の上から下へ伸びている溝、これが外濠、外濠です。これはさらに、画面の上に水田がありますが、あれを越えてずっと南までのびています。

3. 発掘中の濠の状況 断面V字状

これが発掘中の濠の状況です。断面がV字になっていて本来の姿ですともう2メートル近くあり、落ちたらちょっとあがれません。

4. 内濠に囲まれた一角（東西対比）

張り出し部 建物跡（見張り小屋＝物見櫓）
墳丘墓に仕える人々の住む所

吉野ケ里遺跡と弥生文化

これは内濠で囲まれた一画で、東側と西側を対比させて出しています。溝が弓なりに張り出した内側のところに掘立て柱の建物が出ています。

その上か下かの部分に通路があるわけです。出入り口のそばの張り出した部分に見張り台のようなものがあり、弥生時代の後期、この一画に墳丘墓に埋められるような階層の人が住んでいたと思われます。

5. 昨年の夏の段階でのイラスト図（弥生後期2 C 想像図）

内濠4カ所物見櫓

外濠の外 高床倉庫（現在18棟）

これは昨年の夏までの状況でイラストを書いたものです。内濠で囲まれた一画のここに物見櫓が4つでています。外を外濠が囲っていて、画面の左下のところに現在18の高床倉庫が確認されています。だいたい弥生時代の後期2世紀はこうだったろうという1つの想像図です。

6. 整地されている状況

物見櫓→土塁→柵

=最高10mぐらまでとする建築史学からの提言に拠って復元。

これは現在整備されている状況でして、外に物見櫓があり、その外に土塁をめぐらし、さらに城柵をめぐらしている。この城柵はなかったという確証はないのですが、ここらは倭人伝にでてくる城柵というところからくっつけたんだと思います。現在はもっとシビアな復元をやろうと言っているわけですが、実はこの物見櫓も10メートルありまして、われわれの中では5～6メートルがいいところということなのですが、建築家にいちばん高くするとどこまでできるかと聞いたところ穴の間隔からして10メートルだといわれ10メートルのものを作ってしまったということです。それからこの木は日本の木ではありません。こういう10メートルもの木はとれないというのでカナダの桧をもってきた。いったい遺跡の復元にカナダ桧を使うのが適当かという問題もあります。

7. 「魏志倭人伝」の文中 “…宮室・桜観・城柵嚴設…” 内濠部分=宮室、物見櫓=桜観、土塁=城柵というように結びつけたが批判もある。

これは魏志倭人伝です。5行目、「宮室・桜観・城柵、嚴かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。」とあります。ここらのくだりをただちにもってきて吉野ケ里とくっつけてしまいました。内濠が宮室、物見櫓は桜観、土塁をめぐらし柵をした、これが城柵。それから別のところに「邸閣」というのがでてきますが、これがおそらく倉庫だろうという具合にただちにくっつけてしまった

ところに学問を超越した吉野ケ里ブームがあるわけです。

8. 小郡市・一ノ口遺跡…現在破壊消滅してしまった弥生前期～中期の集落を柵列で囲う。

ムラークニへの発達段階（吉野ケ里以前）

これは昨年、吉野ケ里のあおりを受けてつぶされざるをえなかった小郡市の一ノ口遺跡です。弥生時代の前期から中期にかけての集落でして吉野ケ里の以前を語るには重要なもので、歴史的価値は対等であると思っていますが、ブームのかげにつぶれていってしまいました。

9. 一般人の墓

2列。家族ぐるみの群集墓。数百mも続く。

これは一般の人たちのお墓です。二列埋葬といいまして、私どもの間では非常に問題になります。二列の真ん中に墓道があります。それぞれにグループがあって、たとえば右と左は出自によってわけられたりしたという解釈もあり、最近問題になっています。吉野ケ里ではこれが何百メートルと続いて出てきたというのが非常に驚きだったわけです。

10. 頭のない埋葬人骨

争いがあったのでは。

中にこういう頭をもっていかれた人骨がありますが、こういうところから見ますと戦争があったのではないかと思います。

11. 石の矢じりの出土した甕棺葬

身体に打ちこまれたのでは（戦士の墓か）

弥生中期 クニの発生→トラブル発生→農耕の始まり

これは骨がかなりなくなっていますが中に石のやじりが入っていて体内に矢を打ち込まれた状況ではないかと思われま。国の出てくる時期はこういうトラブルもできます。トラブルというのはやはり農耕文化とともに始まります。農村では水争いが起きます。それからだんだん村が統合されて国ができてきますと当然収穫量の多い土地を狙って戦争が始まっていくわけです。

12. 祭祀土壇

一括して埋葬。祭祀に使った土器を収納した竪坑。

お墓にはお墓の祭りというのがありますが。甕棺等がたくさんありますとその脇の方に祭りの後、祭祀土器をまとめて埋納するというようなことがあります。

13. 土器の復元

祭事→集団に対して（個人への供献ではない）

復元するとこうなります。お祭りの土器というのは表面赤塗して、しかもいい土を使います。右のは大型器台

といってあの上に小さな壺をのせます。このころはまだ個人に対するお祭りは行われず、家族単位や集団に対して行われました。

14. 墳丘墓 大環濠の内側にとり入れて計画的に配置された。

今度はお墓ですが、画面の上が先ほどの集落があった地域です。あの辺から外曲がずっと続き、お墓を取り囲んで溝が西から東へと折れ曲がっています。この環濠集落を作ったときお墓を取り囲んで環濠を作っておりきわめて計画的な設計です。

15. 墓 白い粘土を帯状に固めて積む技術＝版築

大きな墓をつくるための大陸系技術の導入を示している。「夯土」(こうど)の名称で中国の文献にみられる。

報道で八角形の墓とされた。(溝より考えて)

↓
実際は長方形ではないか。この溝は後世のもの
↓
長期にわたる調査では新聞報道の後半期からが調査内容について正確な情報となる。

墳丘墓を断ち割るとこういう白い粘土や黒い土をつき固めています。これを版築といいますが、普通弥生時代のお墓というのはきっちりした版築というのはあまりなく、当時の中国の戦国から漢の皇帝のお墓ではこういう版築をよくやっています。こういう技術を用いないと大きな墓は作れません。今回吉野ケ里で周囲に溝が出て、八角形のお墓だとか言われましたが弥生時代にそういうものはなく、系譜からいえば長方形の墓でしょう。何か新しいものが出たとき日本で初めてとか最古だとかの形容語をつけて新聞報道が競争している段階では信用できませんね。調査の後半ごろ出てくる新聞報道が正しいと思っています。

16. 墓内部からの出土品

銅剣1, ガラスの管玉70個

これはお墓の中から出てきた一鑄式の銅剣と管玉が70個ぐらい出てきました。

17. 銅剣(甕棺から出土)

これもお墓から出てきた銅剣。こういうふうに大がめを2つ合わせてその中に入れます。

18. 墳丘墓の完成された姿の代表として始皇帝陵がある。

→以後の東アジアの王の墓の基準となる。

これは長方形や方形の墳丘墓が中国で最も完成された形、秦の始皇帝の陵です。一辺が500メートル前後、高さが40数メートルです。平面図は方形。こういうものが東アジアの王様の墓の系譜であり、弥生時代にも伝来

してきているようです。

19. 銅剣 一本で鑄造されたもの(一鑄式)

吉野ケ里と山口県向津具の出土品がよく似ている。

一鑄式の銅剣です。右が吉野ケ里、左は山口県の向津具というところから大正時代発見されたもので、よく似ています。

20. 19の拡大図

吉野ケ里の方の柄の部分の特写しますとこうなります。左上に鐐があり、節のある部分が柄、その下に舟形の飾りがつきます。ばらばらに出てきたときこういう材料が使い方を考えるいい資料になるわけです。

21. 銅剣と先端につけるかざり

銅剣と結紐型の飾りができます。さきほどのようなものからこれらをどう使ったか類推できます。

22. ガラスの管玉

ガラスの管玉です。よく見ると表面がでこぼこしています。紐状に巻き上げて作ったものです。

23. 韓国のガラスの管玉、銅鐸

Baを含んでいる→中国の原料であることを示している。

これは韓国の扶余で出てきたそっくりの管玉。小型の銅鐸も出てきて、こういうものが九州にも入ってきたのです。このガラスを分析してみますと、韓国のも吉野ケ里のもバリウムが含まれています。バリウムは中国の漢の時代のものに入っていますから、これは原料は中国で、製造は韓国でされたものが吉野ケ里に流れてきたと考えられます。

24. 銅剣についていたもの

絹一蚕の種類

三眠蚕の糸＝細い糸＝楽浪系

またさきほどの銅剣には布がくっついていました。画面の上は麻で下は絹。最近、絹の研究で吉野ケ里から出たのは朝鮮半島の楽浪系の絹であるとわかりました。蚕には四眠蚕と三眠蚕がありまして、四眠蚕は太い糸を出し、三眠蚕は細い糸を出します。四眠蚕は江南系、三眠蚕は楽浪系といわれていますが、弥生時代の前期から後期にかけてはだいたい江南系です。中期の中頃からは楽浪系が出てきて、その後は両方使われます。

25. 京都→倭 機織り 復元

これは京都織物文化館で復元した弥生時代の倭錦というものです。弥生時代の遺跡から出てくる資料を参考に織り出したものです。これは三眠蚕です。倭人伝では日本でも絹を織っていたと記されています。最近では研究

吉野ヶ里遺跡と弥生文化

も進み、これは江南系のデザインでして、実際には楽浪系の糸で中国系の物を真似たという説もあります。

26. 青銅器 銅銚の鋳造を示す鋳型の発見。

吉野ヶ里には工業的都市機能があった。

これは銅銚。吉野ヶ里では大集落を形成する前に、南の方に小さい環濠集落がありまして、その段階ですでにこういう青銅器の鋳造をやっていたのです。このことから工業的、都市的な機能を持っていたということがわかります。

27. 鋳 型

これは佐賀県大和町の惣座という遺跡から出た銅銚の鋳型です。真ん中は福岡の板付から出たもの、右は佐賀県から出たものです。こういうものが朝鮮から日本にはいつてくる最古の武器で、日本ではすぐにコピーしたのです。

28. 鋳型（韓国から出土）

これは韓国全羅南道の霊岩から出たよく似た銅銚の鋳型です。

29. 銅剣3種 朝鮮からのコピー

これは右が福岡の志賀島から出た銅剣の鋳型、真ん中が佐賀市の惣座から出た銅銚と銅剣の鋳型、左が春日市

から出た銅剣です。あの辺で朝鮮から入ったものをコピーしていたようです。

30. 銅剣の鋳型（韓国）…国宝

これも霊岩から出た銅剣の鋳型です。よく似ています。どうも九州に入ってくる最初のもは全羅南道あたりで作られたものが手本になったようです。

以上のように、吉野ヶ里は国の中枢部に当たる集落で村から国へ発展していく状況にあり、邪馬台国が出てくる3世紀初めには衰退してしまっていることです。吉野ヶ里を邪馬台国にあてはめるのは間違いですが、どういうわけか一般には邪馬台国であってほしいという願望が強いわけです。もしこの会場に九州論者がいたら私は早急に立ち去らねばと思うんですが、とにかく考古学からいえば関係ないということです。しかし邪馬台国の原形になるようなものは調査を通じて鮮やかに出てきたということで、国の指定になるに十分な遺跡だと考えています。

あれこれ短い時間の中でまだ十分話せないことがあるのですがこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。